

学生の実習日誌記述から考察する実習日誌指導の検討

—付属幼稚園との連携を考えて—

坂本 真由美

Study on Diary Writing for Pre-Service Practical Training in Kindergarten

—Cooperation with Kindergarten Teachers for Instruction of Students on Writing Methods—

Mayumi Sakamoto

1. はじめに

本稿は、幼稚園教諭免許状・保育士資格取得を目指す本学の幼保系コースを選択した3年次生（以下、EP3年生）が、初めての正規実習である本学付属幼稚園教育実習の際に記述した実習日誌において、付属幼稚園の実習担当教諭が指摘したコメント記述から、学生の日誌の記述の特徴と傾向を抽出し、実習日誌の記述指導の上で、付属幼稚園との連携を検討することを目的とする。

最初の正規実習としての付属幼稚園教育実習に関する養成校側（本学）の指導については、3年次の4月から通年で幼稚園教育実習指導Aの授業において行い、全15回の授業中の約9～10回を実習前の事前指導として経て、翌月5月末から7月までの間、10日間ずつ2つの付属幼稚園で実習を行っているのが通例である。実習日誌の記述指導については、幼稚園教育実習指導Aの授業内で事前指導として基礎的な指導を行う。付属幼稚園では事前オリエンテーションで学生は園の概要等の記述指導を受け、実習中は園の実習担当教諭から毎日、日誌の点検・指導を受けている。実習後は約1か月以内に実習日誌が養成校に返却され、養成校側の幼稚園教育実習指導担当者である筆者が記述内容や指導された点を点検し、残り約5回の授業での事後指導で日誌の省察指導と返却を行っている。

実習開始までの短期間の授業での実習日誌記述指導については、付属幼稚園とも指導の仕方についてはある程度は共通理解を図っているが、授業担当者である筆者の指導が十分行えているのか不明な点がある。また、初めての正規実習生を受け入れる付属幼稚園としても、実習日誌の点検と指導には時間がかかり、学生の視点によって書き方も異なり、誤字脱字の修正、実習内容についての指摘コメント記入、並びに日誌から読み取れる学生の成長の確認を含めると、付属幼稚園における実習日誌記述の指導は、大変な時間と手間がかかる作業であること

は容易にうかがえることである。

実習日誌の記述指導において養成校と現場が更に連携することで、もっと何か実習園の作業負担を減らすなり、もしくは学生が抱える課題や成長を養成校と実習園が実感及び共有することで、更に実習日誌記述指導についてできることがあるかもしれない。

本稿では、初めての正規実習である付属幼稚園教育実習でのEP3年生の実習日誌74人分の記述から、学生の実習日誌の書き方の特徴と傾向を分析し、付属幼稚園との実習日誌指導について連携・協力・改善できる点を発見することを目的とする。

2. 実習日誌分析の先行研究

実習日誌に関する先行研究には、井口（2012）によれば、実習日誌に求められるもの（意義）の研究、実習日誌における集団と個の記録に関する研究、実習日誌の書式改訂に関する研究があると述べられている⁽¹⁾。実習日誌分析方法としては、実習日誌記述指導に関するテキスト（教科書）分析研究や、学生に対するアンケート調査や自己評価から学生の実習日誌に関する意識を探る研究、学生の実習日誌記述から学生の記述の視点を分析する研究がある。例えば、関（2012）は保育に関する実習日誌の形式について検討し、流れ記録型、指導案情報獲得型（視点ごとの記録、個々の姿の把握）、活動まとめ型、エピソード記録型、エピソード記述型、指導案振り返り型にカテゴライズしてそのメリット・デメリットを分析している⁽²⁾。清道（2013）は、学生に対するアンケート調査から保育実習日誌を書くときに感じた困難や負担、実習日誌を書くために実習前にやっておけばよかったことについて分析している⁽³⁾。権藤（2006）は、学生の実習日誌記述の文を、子ども、保育士、実習生について、保育全般、その他のユニットに分けその出現頻度を分析している⁽⁴⁾。平山・加藤（2000）は、幼稚

園実習に関する実習評価がB、Cの学生で、授業で指導した内容に達していない事項を分類し、そこから実習日誌記述についての特徴と傾向を検討している⁽⁵⁾。井口(2011)は、学生の幼稚教育実習日誌記述から現在形・過去形を使い分ける指導法の提案をしている⁽⁶⁾。

このように、実習日誌分析研究は多様な研究方法の可能性を含む領域であるといえるが、実習日誌記述内容の分析については、分析の視点を設定することが難しいと筆者は考える。他者の記述には他者の主観や視点が含まれているのであり、他者の記述を分析するには、その記述者の意図や視点や文脈も読み取らなければならないのであり、分析者の主観をできるだけ取り除き、一般化することの危険性を避けなければならない。しかしながら、実習日誌に関しては、実習の最中全てに養成校の実習担当指導者が現場にいるわけでもなく、実習終了後に提出された実習日誌から、実習園の指導教諭や学生の記述を分析するにしても、既にそこに時間的にも空間的にも距離が生じており、実習園の指導教諭や学生の意図や意識を的確に掴むことは困難であるといえる。よって、記述の特徴と傾向といったことしか最終的には言えず、まだまだ実習日誌の記述分析方法には多くの課題が残っているとみえる。

そのような実習日誌分析方法の課題が残る中、本稿では、実習日誌記述指導の在り方を探ることを目的に、できるだけ他者の記述を客観的に分析するため、まず実習園の指導教諭の記述に焦点を当てる。すなわち、学生の実習日誌記述に関してどのような点について実習園の指導教諭が考察や修正を要求しているかに焦点を当てる。そこから、学生に実習日誌記述や保育者としての力量においてどのようなことが求められているのかを探り、そのギャップを埋めるために実習園と養成校がともに学生の保育者としての力量を育てるためにどのような連携ができるのかを検討する。

3. 研究方法

本稿の研究方法は以下のとおりである。

(1) 分析対象

本学の平成28年度3年次生で幼稚園教諭免許状及び保育士資格取得希望者である幼保系学生（EP3年生）111名の内、5月31日～6月10日及び6月20日～7月1日の各期間に10日間付属幼稚園であるA園で実習を行った計74名の実習生の実習日誌を分析対象とする。付属幼稚園はA園とB園の2園があるが、今回は分析方法の一貫性を保つためA園のみの実習日誌を使用する。

(2) 付属幼稚園教育実習日誌の構成と分析使用項目

本学の付属幼稚園教育実習で使用する実習日誌はA4サイズで、「実習園の状況・保育方針」、「配属クラスの状況」、「実習期間中の行事予定」、「実習日誌（1日ずつ）」、「本日の考察（1日ずつ）」、「指導案」、「全体を通しての感想と反省」、「先生方からの講評」、「園長先生からの講評」から構成されている。今回の分析では、上記の構成の中から次の3項目、①「実習園の状況・保育方針」2頁分、「配属クラスの状況」1頁分、「実習期間中の行事予定」1頁分、②毎日の時系列の「実習日誌」3頁分×10日間の30頁分の記述、③毎日の「本日の考察」1頁分×10日間の10頁分の記述、即ち一人あたり44頁の記述から分析する。

(3) 分析方法

学生1人ずつの実習日誌から、上記の(2)で選んだ①～③の各頁を点検し、A園の指導教諭から考察と修正が必要と指摘されたコメントと、A園の指導教諭から指摘された点に対する学生の訂正及び考察記述を抽出し、エクセルで入力・分析を行った。

次に、A園の指導教諭から考察と修正が必要と指摘された内容から、何が学生に求められているのかを分析し、養成校である本学の幼稚園教育実習指導Aの授業で、更に実習日誌記述指導でA園と連携できる点を明らかにする。

4. 幼稚園教育実習指導Aにおける実習日誌記述指導

毎年最初の正規実習である付属幼稚園教育実習の準備は、カリキュラムとして幼稚園教育実習指導Aという授業でEP3年生を対象に行う。以下授業の概要である。

(1) クラス編成

平成28年度は4つに分けられたEP3年生111名の1組・2組を合体して「EP1クラス」、3組・4組を合体して「EP2クラス」とし、前期と後期を合わせて通年の15回授業を実施している。

(2) 記述作業に関連する授業内容

①実習手続き書類作成作業

平成28年度は全15回の授業中の約9～10回を実習前に行った。授業が始まって約2か月後に実習に行くため、「付属幼稚園についての説明（実習手引きにある概要確認、地図確認）」、2園ある付属幼稚園のどちらかを決める「実習希望調査」、「保険手続き」、「給食手続き」などの事務的書類の説明が終わると書類の記入作業に入る。

次に、授業日程、オリエンテーション日程、実習日程を確認し、付属幼稚園での現地オリエンテーションを5月中旬に計画しているため、それまでに実習手続きと実習内容の一連の基本の流れの内容を押さえることを目的としている。

②チームワークと連関させる記述作業

付属幼稚園でのクラスが決まった時点で、チームワークを育てる意味でもリーダー、サブリーダーを決め、チーム内で協力と確認をしながら、書類記述作業の潤滑化、提出書類の内容や締切厳守のチェック機能化、書類の提出の仕方のマナー化（揃える、汚さない、学籍番号順に整える等）の指導をしている。

③出勤簿と実習調書の書き方指導

公式書類を仕上げるこの段階から具体的な書き方作業が入ってくる。出勤簿の意義と押印や記入ミス防止の指導後、実習調書（履歴書のようなもの）の指導に入る。特に実習調書の作成では、学生もそのような公式書類を書いた経験が少なく、緊張しながら作業をするためミスが多い。よって、実習調書は下書き指導、回収とチェック、写真の写り方のチェックまで含み、清書まで2コマ費やしている。公式書類は第一印象として見られると捉え、実習は手続きから始まっているということや、書類の書き方や手続き方法の指導はこれが最初で最後と学生に意識化を図り、今後の実習は学外の園で行われるため、各学生自身で手続きを進めていかねばならないことを理解する機会と位置付けている。

④授業における実習日誌記述指導

実習日誌の記述指導に関しては、毎年試行錯誤をしながら取り組んでいるが、ここ2年間は、付属幼稚園とテキストを共有し、養成校の授業ではどこまでの指導を終えて実習に出しているかを情報共有している。授業で実習日誌の意義と書き方のポイントを踏まえるのは当然であるが、幼稚園教育実習指導Aの授業で筆者が毎回チェックする簡単な調査では、学生の不安の第1位は、「実習に遅刻しないだろうか」という不安と、「実習を終えて帰宅後、翌日までに実習日誌が書けるだろうか」という時間と体力の不安という結果が出ている。したがって授業では、まずは実習日誌を書く学生自身のペースを把握させるために、40分という時間内でテキスト内に掲載されている時系列の日誌モデル、エピソード型の日誌モデル、部分実習のモデル指導案の計3種類の書き方について説明し、その後実習日誌の様式に合わせてボールペンで写す練習を取り入れている。1回目の練習では、ほとんどの学生が最初からボールペンで書くことができないことを知る。よって、下書きをしてから書くという作業を始める学生や、字が斜めになる学生は下書きの線を引く作業など、自分なりの書き方の工夫を始め

る。これによって長文を書く場合の各自の時間配分ペースや癖を学生は掴むと同時に、多様な日誌の書き方があることを理解する。練習した日誌記述は回収し、筆者が文法、文体、漢字等のミスを点検後、学生に返却し修正作業を求める。

しかしながら、筆者が効果として感じた実習日誌指導は、昨年度行った毎回の実習指導の授業内容の振り返りを、実習日誌の考察頁のフォーマットで書く作業を取り入れた時である。毎回授業の終了前約30分を使って授業の振り返り、いわば今日の授業で何を学んだのかを考察する記述作業に取り組んだのであるが、学生一人一人の考察の視点が多様であり、筆者自身も読むのが興味深く、学生から学ぶ点も多かった。よって、考察する作業をもっと今後も含めねばならないと考えている。

⑤実習園からの提出課題の記述作業

5月中旬に行われる付属幼稚園での現地オリエンテーションで、学生達は「実習園の状況・保育方針」、「配属クラスの状況」、「実習期間中の行事予定」について説明を受ける。オリエンテーション中、学生達はメモを取り、オリエンテーション終了後に、実習日誌における「実習園の状況・保育方針」、「配属クラスの状況」、「実習期間中の行事予定」の項目の記述作業をする。また、園からは週案などの資料も養成校に届けられ、実習指導の授業の時間に余裕があれば、授業内で資料内容の記述をすることもある。完成したら実習クラス別にまとめて園に提出をするため、ここで実習クラス別のチームワークが作用することになる。

⑥現地オリエンテーションでの学びを振り返るラベルワークとプレゼンテーション

実習園での現地オリエンテーションが終了すると、各実習クラス別にオリエンテーションでの学びについてラベルワークを行っている。すなわち、各実習クラスメンバーでグループディスカッションを行い、現地オリエンテーションで学んだ内容を学生同士で確認し合い、学んだ内容を付箋紙にキーワードで書き、それらの付箋紙を使って学んだ内容を図絵で表現し、プレゼンテーションをすることで、チームワークを兼ね、多様な意見をまとめる力と表現する力の育成を図っている。

⑦実習中の実習日誌記述作業

付属幼稚園の実習では、学生達は毎日、実習日誌の記述と本日の考察の記述を行い、各クラスの実習担当教諭から日誌の点検と指導を受ける。実習日誌の頁には、「日付」、「天候」、「気温」、「クラス名」、「幼児数」、「時刻」、「幼児の活動」、「保育者・実習生の支援」、「具体的な改善案」、「本日の考察」の項目があり、学生はボールペンで記述する。修正液の使用は園で認められている。また、実習中に、保育計画の研究として5～10分ほど活動の責

任を実習生に任せる部分保育がある。その際学生は「指導案」の頁を使って計画を立て、実習担当教諭から指導を受け、修正・清書して本時の活動に臨む。

実習最終日には、「全体を通しての感想と反省」を学生が記述し、最終的に「先生方からの講評」、「園長先生からの講評」を頂き、実習日誌の記述は終了する。

⑧授業における実習事後指導としての記述作業

実習終了後は、「実習全体の省察」、「部分保育の省察」、「実習自己評価と実際の実習評価とのギャップの考察」、「日誌の省察」の4種類のレポート作成を授業で行っている。また、実習では学生は10日間同じ年齢児のクラスに入るので、2つの付属幼稚園において実習生が担当した年齢児別にグループを作り、ラベルワークを通して園児の発達について図絵で表現しプレゼンテーションをすることで、発達の理解と共有を図っている。

⑨実習日誌へのコメントと返却

実習日誌は、筆者が点検した後可能な限りコメントを末頁に書き、学生に返却している。また、実習日誌の活用方法として、園の担当教諭から指摘された点は、学生にとっての課題であるので、別ノートにまとめることを勧めている。

以上が、幼稚園教育実習指導Aの授業における実習日誌の記述力を育成するための指導内容であるが、本稿における実習日誌分析を通して、上記の指導内容の改善点とさらなる付属幼稚園との実習日誌指導の連携の在り方を検討する。

5. 実習日誌における実習園の指摘からの分析

(1) 「実習園の状況・保育方針」、「配属クラスの状況」、「実習期間中の行事予定」の記述分析

実習日誌の導入ともいえる「実習園の状況・保育方針」、「配属クラスの状況」、「実習期間中の行事予定」の3項目の実習日誌記述において、実習園から指摘された点を上位から表1に挙げた。

「下書きの鉛筆跡を消す」という実習園の指摘が最も多かった背景には、これら3項目が実習指導の授業にお

表1 「実習園の状況・保育方針」、「配属クラスの状況」、「実習期間中の行事予定」の項目における実習園からの指摘 (74名中)

	園の指摘箇所	学生による訂正	%
1	下書きの鉛筆跡を消す		24
2	製作	制作	20
3	お皿	皿	16
4	(体言止めに対し) 語尾を揃える 例) 必要。好き。	～である。 例) 必要である。 好きである。	12

いて、初めての实習日誌記述の箇所になるため、学生達に下書きをして記述ミスをしないう意識づけしていることと、丁寧に記述することの指導をしていることが影響している。また、この3項目の記述の仕上げまで約1週間の時間を与えているが、それに間に合わせるのに必死がために下書きを綺麗に消すという基本的な配慮に学生が至らなかった可能性がある。もしくは学生としては消したつもりになっているのかもしれない。実習クラス別にまとめたチームで作業点検をすることをルーティン化しているが、最終的に下書きを消すところまで実習指導の授業内で徹底させ確認する必要がある。

また、「語尾を揃える」という実習園からの指摘は、語尾で体言止めをしている学生になされている。日誌においてもレポートにおいても体言止めを好む学生が年々増加している傾向は既にあり、「～する。」、「～である。」というように語尾をウ段現在形で終わる練習を更に学生に意識化する必要がある。

その他、日本語の文法的、文体的、記述(作文)の配慮として指摘された箇所を表2に挙げる。

表2 日本語の文法、文体、作文の配慮として修正を指摘された箇所(分析対象全頁から)

出だしは一□空ける、改行は一□空ける、接続詞を使う(あと→また)、
枠内に納める、箇条書きを文章にする、定規で丁寧に書く、
修正液で消す

また、表1の「お皿」のように用語の前に「お」を付ける学生の傾向も明らかである。同様なミスを指摘された用語を表3に挙げる。

表3 学生が日誌において前に「お」をつけていた日本語(分析対象全頁から)

お皿、お箸、お当番、お手拭、おままごと、お手本、お話

次に、漢字を使用するように指摘された用語は表4の通りである。

表4 実習園より漢字に直すよう指摘された日本語(分析対象全頁から)

あいさつ→挨拶、声かけ→声掛け、あそび→遊び、
つみ木→積木、イス→椅子、すべり台→滑り台、
なわ跳び→縄跳び、泥だんご→泥団子、葉っぱ→葉、
ちょうちょ→蝶、いろんな→色々な、はみがき→歯磨き、
おしゃべり→話、気づいて→気付いて、とき→時、
なおす→片付ける、おもちゃ→玩具、けが→怪我
おたより→お便り/お便り帳、ご飯つぶ→ご飯粒、
つながる/つなげる→繋がる/繋げる

更に日本語や保育専門用語の使い方のミスを指摘された箇所を表5に、子どもに対して使役動詞や可能動詞を使っているため修正するよう指摘された表現を表6に挙

げる。

表5 実習園から指摘された日本語・保育専門用語の修正（分析対象全頁から）

<漢字のミス> 務かり→預かり, 禅足→裸足, 隣園→降園, 運てい→雲てい, 施行錯誤→試行錯誤 <表現の変換> 自由遊び→好きな遊び, 室外→戸外, 教室→保育室, ホッチキス→ホチキス, 魚屋さん/うどん屋さん→魚屋/うどん屋, ハマる→集中する, おやつの→デザート, 思っきり→思い切り, カラーペン→マーカー, 班→グループ, キックボード→スケーター 「いただきます」のせりふ→「いただきます」の挨拶, 折ることができない→折ることが難しい, 子どもが掴めない→子どもが分からない <人物の表現> 先生→保育者/担任, 児童→園児, 幼児, 年長児→5歳児（配属クラス年齢を明確に）

表6 実習園から修正指摘された子どもに対する使役動詞・可能動詞（分析対象全頁から）

(子どもに) 考えさせる, させている, やらせている, 習慣化させる, 集中させる, 行かせる, 並ばせる, 手を洗わせる, 持ってきてもらう, 持ってあげる, 開いてあげる, 歌えられる, 絵の具をつけれる

表1から表6までの実習園からの指摘については、修正が必要な学生の記述としてよく見られる傾向であり、授業内での指導で指摘はしている箇所ではあるが、実際にはやはり認識していない学生がいることがわかったため、実習指導の授業内で更に徹底指導することで少しは実習園の負担を軽減できる箇所であると考え。実習日誌記述指導の改善項目として受け止めたい。また、学生は実習園から指摘されたところを修正液で修正しているため、実際はもっと修正箇所が多くあると予測する。

(2) 日々の時系列の「実習日誌」記述分析

①「子どもの活動」の項目で実習園から指摘された内容
 実習が始まると、学生は毎日子どもと保育者との関わりを観察することになる。表7は10日間の日々の実習日誌から「子どもの活動」の項目のみに絞って分析し、実習園から指摘された箇所の上位3点である。実習現場に入ると、学生の観察領域も広がるため、実習園からの指摘では益々保育の専門用語に関するが多くなっている一方で、相変わらず話し言葉の「先生」を用いる傾向や体言止めをする傾向は強いといえる。

表7 日々の実習日誌における「子どもの活動」の項目記述で実習園から指摘された箇所の上位（74人中）

	園の指摘内容	学生による訂正	%
1	自由遊び	好きな遊び	5
2	先生	保育者/担任	3
3	体言止めではなく語尾を揃える	～である。等	3

また、「子どもの活動」の記述においては、保育の自然環境における用語の修正指摘が見られたが、表現の仕方は表8のように複数あった。

表8 「子どもの活動」の項目記述で実習園から指摘された自然についての箇所

かぶとむし→カブトムシ/甲虫, だんごむし→ダンゴムシ/団子虫, 豆の花→藤の花/フジの花

植物の名前について学生が記述を間違っていることも注目点である。藤の花を豆の花と書いていた学生やトマトをひまわりと書いていた学生は枝や葉で区別しているのか、学生がもっと植物に対する興味と関心を持つことの必要性があることがわかった。

また、「カブトムシ/甲虫」、「保育者/担任」など、複数種類の表記が可能な場合の記述指導について、園と共通理解を図ることも検討したいと考える。

更に、登園後の子どもの活動として、「準備が終わり次第好きな遊びをする」という記述をしていた学生に対し、実習園の教諭は、「準備について具体的に書くように」と指摘をしている。即ち、子どもが家から持ってくるものにはたくさんあることを理解すること、一つ一つを整えて好きな遊びに入ることを指導している。この指導の後、学生は「連絡帳を出し、タオルを掛け、カバンを片付けて好きな遊びをする」と修正している。一人一人の子どもの姿を詳細に観察することの重要性を実習園の教諭は指導している。指導教諭の一言が学生を育てることを認識し、授業でも指導者側も学生も意識を共有しなければならない。

②「保育者・実習生の支援」の項目で実習園から指摘された内容

この項目は、毎日の時系列の実習日誌の頁で「子どもの活動」に合わせて保育者がどのような支援をしたかを学生が観察記述し、更に実習生が行った支援を記述する項目である。この項目で実習園から最も指摘された内容は「なぜそのような声をかけたのか」、「なぜそのような支援を行ったのか」といったように支援の理由を問いかける指摘点が多かった。

支援における保育者の「なぜ」という問いかけは、①危機管理の場面、②確認の場面、③指示の場面、④褒める場面特に実習生になされているようである。表9に保育の場面ごとで整理してみた。実習時期が6月～7月であるためプール活動や水遊び、園外活動が積極的に行われる時期であり、「安全管理」、「確認」、「指示」の意図や理由について学生が考察する場面を実習園の指導教諭は的確に生かしていることがわかる。

危機管理、確認、指示といった場面は、実際に子どもと関わりながら現場で理解し身に付くことの方が多いと

表9 「保育者・実習生の支援」の項目で実習園から指摘された内容の例

	園の指摘箇所	実習生の訂正
危機管理	(プールでの活動前の場面で) 子どもたちに問いかけながら水の危険性について話す	なぜ 久しぶりのプールで興奮している子どもたちを落ち着かせ、水の危険性について考えることで事故を未然に防ぐため
確認	子どもたちに必要な道具を伝え復唱するよう声を掛けた	なぜ 子ども自身がどれだけ理解しているか確認するため
指示	洋服が汚れている子どもを保育者のところに連れていき、先にシャワーで泥を落とすことを伝える	なぜ 着替える作業があり、服が汚れている子どもは他の子どもよりも次の作業への準備に時間がかかるので
褒める	日付の特殊な読み方を知っている子どもを褒める	なぜ もっと知りたいという好奇心を高めるため

思われるが、養成校の授業においても映像等の手段でこれらの場面での子どもとの関わりのイメージを持つ努力をし、遊びの場面での子どもの様子を観察する教材を取り入れる検討が必要である。

更に、学生が子どもを支援する中で子どもとの関わり方で葛藤が見られたのが、泥遊びと水遊びの場面である。

<泥遊びの場面>

実習生の記述：「泥でなかなか遊ばない子どもに、遊びたくなったら一緒に遊ぼうと声を掛けた」
指導教諭の指摘：「なぜそのような言葉をかけたのか」
実習生の記述：「泥で汚れることが嫌いな様子だったので、興味がわくまで見守ろうと思った。子どもの気持ちを尊重したかったからである」
指導教諭の指摘：「泥遊びをしたいというような遊び方を実習生が示しても良いのでは」

この場面では、学生が子どもの気持ちを尊重することを重視し、見守りに入っているが、指導教諭からは、実習生が積極的に動いてもいいのではないかという提案がなされている。子どもの気持ちをどこまで尊重するのか、見守りと関わりの境目をどこで見極めるのか、学生が葛藤している様子がうかがわれる。

<水遊びの場面>

実習生の記述：「水を使いすぎないように水を貯めてから使うように声を掛ける」
指導教諭の指摘：「なぜ水を使いすぎではダメなのか」
実習生の記述：「水は無限にあるものではないため使

いすぎるとなくなってしまうから」
指導教諭の指摘：「水を大切に使うという意識をもてるような声掛けや活動ができるとよいのでは」

この場面では、学生が子どもに「～してはだめ」という視点で声掛けをしているため、指導教諭が子どもの目線で関われないか提案している。「保育者・実習生の支援」の項目の記述では、まだまだ学生が子ども目線になれていない様子が多々うかがえる。色々な場面で実習園の指導教諭が学生を観察して指摘しているからこそ、学生が徐々に子どもを理解することにつながるがよくわかる。授業においても、学生に葛藤の場面をいかに体験させるかということが課題である。

③「具体的な改善案」の項目で実習園から指摘された内容

「具体的な改善案」の項目は、「保育者の支援・実習生の支援」において、もっとよりよい方法があったのでは、と実習生が改善案を提案できる項目である。この項目の記述の特徴は、学生が「もっと～すべきであった」と後悔している記述が多いことである。更には、保育者の支援に対しても積極的に改善案を図まで書いて提案している学生もいる。この項目は、学生の積極性の育ちの確認や創意工夫を膨らませる項目として、記述を楽しむことができた学生もいるようである。しかしながら、最も記述で差が出た項目であるとも考える。10日間にわたってこの項目をたくさん埋め尽くした学生もいれば、毎日ではないが全く書き込めていない学生もいた。更には、指導教諭の指摘にも応えていない学生もいた。筆者が園の指導教諭の立場であったとしても、この項目が空白なのは寂しいと思える。「具体的な改善案」の項目は、保育者と実習生が立場を越えて子どもたちのためによりよい保育について考える大変画期的な項目欄であったといえるし、未熟な学生の改善案を受け入れ共に学ぼうとする園の先生方の高い意識がある。改善案を空白にした学生は、まだそこまで案が浮かばなかった可能性もあるかもしれない。授業での事後指導で、「具体的な改善案」の項目について学生の意識を確認・検討する必要があると考える。

④「考察」の項目で実習園から指摘された内容

この項目では、実習園の教諭は学生の感じた気持ちをそのまま尊重していると考える。というのは、そこまで指摘が入っていなかったからである。日本語について文法的な指摘は多々あったが、この項目における学生の記述に最も園の指導教諭の指摘が多かったのは「叱る」という表現に対してであった。例えば、「実習生までもが子どもを叱ることがないように……」、「子どもを叱る際

には」という表現をしている学生に、園の指導教諭は「叱っているのではない」、「表現に注意して下さい」、「注意をしているのである」と指摘をしている。学生にとっては、園の指導教諭が子どもたちに厳しい口調で何か声掛けをした際に、「子どもを叱っている、怒っている」と感じているのであろうか。筆者も学生達の考察を読んでいて感じたのが、学生達が子どもたちに嫌われることを恐れていることである。実際に「子どもたちに嫌われることのないように」という表現を使っている学生もあり、「叱る」、「注意する」といった子どもに対する毅然とした態度を執ることにまだ躊躇している姿がある。「本日の考察」の項目でもう1つ園の指導教諭からの指摘が多いのが「先生(=実習生)も声掛けをして下さい」、「子どもたちは先生(=実習生)の一言で180度変わります」といった指摘である。子どもに毅然とした態度を執る力は、子どもたちに声を掛けていかなければ実感しないことなのかもしれない。多くの学生が記述していたように、「子どもと積極的に関わるか、子どもを見守るか、その見極めが大切である」というのが、求められる保育者の専門性であることを再認識させられた実習日誌分析であった。

6. おわりに

付属幼稚園実習日誌の園の指導教諭の指摘と学生の記述から、今回明らかになったのは以下の5点と考える。

○正しい日本語の使用、正しい文体の使用、保育専門用語の使用については実習指導の授業で指導を強化することで改善ができる可能性がある。このことで、少しでも実習園の指導教諭の負担を軽減する努力を筆者と学生が一致団結して取り組まなければならない。

○付属幼稚園での語彙の使用について一定のルールが見えてきたので、園と連携して語彙の使用について共通理解を更に図る。

○自然環境に関する学生の知識不足がうかがわれたため、学生が自然に興味・関心をもつ教材や機会を検討する必要がある。

○保育者と子どもとの関わりにおいて「なぜそうするのか」という疑問を更に持つように指導できるよう、指導方法の工夫とふさわしい教材選択に取り組む必要がある。

○学生が子どもに対して見守りと毅然とした態度を執るべき時の見極めについて更に学ぶ意識を持てるよう、「葛藤」という場面について学生とともに事後指導で考察できるよう方法を検討する。

以上の5点を中心に、筆者も実習指導の授業で意識するとともに、実習日誌記述指導を中心とした付属幼稚園

との指導の連携を園の先生方と共に研鑽していきたいと考える。

引用・参考文献

- (1) 井口眞美,「保育者養成校における実習日誌に関する指導法の研究—幼稚園実習日誌に用いられる”時制”についての調査から—」, 淑徳短期大学研究紀要第31号, 2012年。
- (2) 関仁志,「保育に関する実習日誌の形式」, 富山国際大学子ども育成学部紀要, 2012年。
- (3) 清道重都子,「保育実習日誌の記述における困難感の分析」, 日本教育心理学学会第55回総会資料, 2013年。
- (4) 権藤眞織,「保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連—学生自身による日誌の内容分析を通して—」, 近畿大学豊岡短期大学論集第4号, 2007年。
- (5) 平山許江・加藤怜子,「教育実習に関する現場教師との連携について(その2)」, 文京女子大学研究紀要第2巻1号, 2000年。
- (6) 井口眞美, 前掲書, 2012年。
- (7) 小櫃知子, 守巧, 佐藤恵, 小山朝子,『幼稚園・保育所実習パーフェクトガイド』, わかば社, 2015年。
- (8) 小櫃知子, 田中君枝, 小山朝子, 遠藤順子,『実習日誌・実習指導案パーフェクトガイド』, わかば社, 2015年。

謝辞

本稿の執筆にあたり、実習日誌分析を行うことを快諾して頂きました付属幼稚園の園長・主任・先生方に心から感謝申し上げます。